

タイトル	コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 中：マートン知識社会学の研究
著者	犬飼，裕一
引用	北海学園大学学園論集，134：A1-A18
発行日	2007-12-00

コミュニケーション研究のヨーロッパ種とアメリカ種 中

—— マーティン知識社会学の研究 ——

犬 飼 裕 一

「彼は自分自身がこうあるべきだと考える自分についての姿を思い描き、このイメージはあるがままの彼自身についての知識とつねに闘争することになる」(ラッセル『幸福論』、堀秀彦訳)

目 次

はじめに

1. マーティン、常識から常識の矛盾を突く知性
2. ヨーロッパ種とアメリカ種
3. 用語法と概念構成
4. 専門家と大衆——仮説演繹法と経験帰納法
(以上、第二三三号)
5. 単独の研究者と組織された研究者
6. 戦争とプロパガンダ
7. 歴史家という先行者
8. 芸術との関係

5. 単独の研究者と組織された研究者

「またシカゴ学派は一人の巨人が生み出したものというよりも、優れた複数のリーダーと弟子たちとの知的な相互作用や、分野を異にする研究者間の交流、さらに学外の協力者や財団など様々な人々の協働活動の産物である。こうした知的世界の歴史自体は、創造的な研究を生み出す組織に関心を有する者には興味がない対象である。」(中野正大・宝月誠編『シカゴ学派の社会学』、世界思想社二〇〇三年、「はじめに」より)

「グローバル化」という名の「アメリカ化」の過程は、学問の世界においても大きな影響を及ぼしている。学問そのものの「質」や「性格」をめぐる議論には論者の個人的価値判断が不可避に介在する。すでに論じてきたヨーロッパ流の知識社会学が集中する「専門家」や「知識人」と、アメリカ流のマスコミ研究が専念する「大衆」のどちらが研究に値するのか? という問いに対しては、結局のところ個人の価値判断でしか答えられないのである。一方には、古来の偉

大な著者たちが書いた書物をめぐって思索することに価値を見出す人々があり、他方には、「インテリの自己満足」ではなくて、今現在社会を動かしている大勢の人々の作り出す現実こそ興味を感じる人々がいる。どちらを選ぶのか、あるいはいろいろな割合で両者を折衷することを選ぶのか、あるいはどちらにも興味を感じないのかは、究極的には、個人の価値判断であり、多少大げさに言えば、各々の学問観や生き方にすらつながっている。

ところが、グローバル化・アメリカ化が社会学にもたらした動かしことのできない事実が一つだけある。それは社会学の研究組織が多くの領域で決定的に大型化したことである。先に今日の日本の社会学にも見られる「理論」と「実証」の間の分裂状態について書いてきた。「実証」の側は、ほぼ完全にアメリカの流儀を理想としている。そして大勢の人員を使い、行政や企業の支援を受け、統計的な手法を用いて大規模な経験的事実の収集に従事している。今日、日本国内の各研究機関に属する「社会学者」の圧倒的多数は「実証」の研究者である。これに対して、「理論」の側は、数の上でも劣勢で、ますます強まっていく実学志向の中で、単独で仕事をしている^{ブラグマティズム}。

「主題、問題規定、経験的データに対する考え、技術に対する態度などの場合とおなじことが、研究員の組織についてもいえる。すなわちこの点で、ヨーロッパ種とアメリカ種はそれぞれ異った立場をとる。ヨーロッパ種では、通例学者がひとり単独で作業し、おそらくいつもその直接監督下にある一人か二人の助手の手をかりて、図書館で入手できる書物を調べる。これに對し、アメリカ種は、調査チームとして、或いは多数のチーム

からなる大調査組織として、作業することが次第に多くなっている。」(四一三頁)

ここでは書物や学術雑誌、新聞といった活字の世界だけを見ていても分らないことが起こっている。研究者として研究予算の申請や配分、実行といった現場を見てみると、事態がかなり急速に進行していることを実感する。書物はしばしば単独の著者が書いており、名を知られた著者の新刊が出れば、愛読者はそれを買うといった習慣の下に市場が成立している。言い換えれば、書物は著者の個人名に依存するメディアなのである。このため一人で作業をしている「ヨーロッパ種」の勢力が実際以上に大きく感じられる。これに対して、「アメリカ種」すなわち大調査組織の人員は、しばしば大勢の共著の一員であり、場合によっては、全く登場しないか、あるいは著者のあとがきや謝辞に登場する人々である。しかし、単独で仕事をする「ヨーロッパ種」が書齋で思索に耽り、本を読んで仕事をしている間にも、「アメリカ種」は多額の研究費と大量の人員を投入して日々存在感を増している。例えば、日本の文部科学省の科学研究費——いわゆる「科研費」——の申請用紙を一瞥すれば、人文社会科学系の古風な研究者が「理系みたいだ」といつていた研究組織の一端が見えてくる。各種の費目を網羅した申請書の諸項目は、「ヨーロッパ種」の研究者には従来なじみのなかったものばかりである。まさに、「多数のチームからなる大調査組織」が活動の領域を広げつつある最前線である。

それはマートンの判断でいうならば、「経験主義」や「経験帰納法」の一層の普及ということができるだろう。また、「われわれのいうこ

に特に意義があるかどうかはわからないが、少くともそれは真実である」という旗を掲げる人々(四〇〇頁)が、ますます勢力を拡大しつつある状況でもある。

ただし、マートンの考察はさらに深い問題に向かっている。

「コミュニケーション研究にみられるこれらの異った形態」承前・先に引用した研究体制の相違」の比較をさらにおし進めていくことは、おそらく有益に違いない。例えば、上述した二つの領域でそれぞれ研究を行う人々の社会的出自を比較すれば、どうであろうか。その出身は、二つのタイプの研究がもつ社会的機能の差にに応じて異なっているのであるか。マンハイムがその旨示唆しているように、種々の社会体制にとってマージナルな人間たることが多い知識社会学者は、マージナルな性格上、種々な集団の多様な知的視界を相互に和解させるとまではないかなくとも、どの視界でも知覚することができるであろうか。これに対して、一経済体制または一社会体制の内部で移動する人間たることの多いマス・コミュニケーションの研究者は組織を運営し、市場を求め、多数の人々を統制する連中の求めるデータを探ることになるであろうか。ヨーロッパにおける知識社会学の出現は、基本的に相対立する社会体制の間の根本的な分裂(そのために、多くの人が自分の技量を有意義に発揮できる体制が全く確立されていないと思い、何よりも先ず意味ある社会体制を求めざるを得なくなっている程の)に関連しているのであるか。」(四一四―四一五頁)

これもまた鋭い洞察である。いうならば、知識社会学の知識社会学

がここに展開している。こうして、マートンは、知識社会学者マンハイムまでも「マージナルな人間たることが多い知識社会学者」の一員として説明しようとするのである。問題は、知識社会学がなぜ成立しなければならなかったのか? という問いに直接つながっている。しかも、これは知識社会学にとって、おそらく最大の問題なのである。

知識社会学は学問の性質上、一つの宿命を不可避に背負っている。それは、「知識」を生産することを任務とする科学(学問)についての「知識」を研究対象に選んでしまった以上、絶対に避けることはできない。すなわち、知識社会学を研究する知識社会学者は、どのような社会的背景、あるいは状況の下で特定の「知識」を研究対象として選んだのか? という問題である。マートンはまさにこの問題を意識している。

さらにいうならば、マートンはマンハイムの議論が切り開いた可能性をさらに深いところまで探求している。古くから言われてきたことを繰り返すならば、「イデオロギー」について論じる知識社会学のイデオロギー性や存在拘束性について問われると、マンハイムと追隨者たちは自分も含めて「自由に浮動する知識人」だといって逃げを打つ。それならば、「自由に浮動する知識人」の「自由」とは何なのか? 何からの自由なのか? 自由とは裏腹に知識人の共同体内部で特定の流儀や何かに拘束されて不自由に暮らしているのではないのか? といった疑問が次々と浮かんてくる。これらは難問である。あるいは、知識人の「自由」とは経済的な階級の利害からの自由であると返答するならば、経済的な利害とそれ以外を恣意的に区

別するイデオロギーから自由ではないのでは？という、かなり致命的な疑義に直面せざるをえない。すると、この種の知識人共同体の流儀やイデオロギーによる拘束を考えるならば、いわゆる「大衆」の方がはるかに自由なのではないか？ということになり、結局のところ論理的に延長し、突き詰めていくと、マンハイムは知識人と大衆の区別を「知識」という当人の恣意的な概念によって一方的に行っているだけなのではないか？というほとんど反論不可能な論難に行き着いてしまう。つまり、マンハイムは自分が不自由な大衆とは異なつて「自由に浮動する知識人だ！」と自称しているだけだというわけである。要するに大衆社会化への趨勢に知的エリート——フリッツ・リンガーの言葉でいえば「読書人」——の勝手な感想を表明しているにすぎないといわれても反論は難しいのである。これは強力な批判である。強力すぎて、マンハイム流の知識社会学や知識人論全般が立ち止まってしまい、それ以上展開できなくなるほどの批判力である²。

マートンの議論が重要なのは、それ以上展開していくヒントを提供してくれているところにある。それはマンハイムのように漠然とした形で知識人を「自由に浮動する」と主張するのではなくて、知識人内部にも区別を設けることである。マートンは、コミュニケーション研究に取り組む知識人を、「体制内部の人間」と「マージナルな人間」に区別する。語の元来の意味からして、「体制内部の人間」は多人数で組織された人々であり、対する「マージナルな人間」とは単独で仕事をする人々である。

マートンの議論を注意深く読むと、「相対立する社会体制の間の根

本的な分裂」が研究活動の円滑な進行を妨げているヨーロッパと、そうではないアメリカという対比が暗示される。この文章が書かれた一九四〇〜五〇年代を考えるならば、第二次世界大戦の原因となつた種々の全体主義体制間の対立が想起される。端的に言えば、当時ヨーロッパは「イデオロギー」の本場であつた。イデオロギーは互いに対立し合い、結果は血みどろの総力戦。これに対して大西洋を隔てたアメリカ合衆国はヨーロッパのイデオロギー対立とは別に、平和な大陸国家として存在していたわけである。騒乱のヨーロッパと平和なアメリカ。学問よりも政治が優先されるヨーロッパと、科学探求が優先されるアメリカ。ヨーロッパ人のように政治的理念が学問を支配するのではなくて、経験的実証的事実を探索するアメリカ人ということになるだろうか。異論はいくらでも出てくるに違いないが、アメリカ人マートンの理解がこのようなものであつたと考えることは、必ずしも無理なことではない。ただし、本稿の課題はマートンの愛国心を顕彰することではなくて、知識社会学にとつての可能性を探索することにある。

6. 戦争とプロパガンダ

「今日の世界大戦は決して近代内部の戦争ではなく、近代世界の次元を超出し、近代とは異なる時期を画そうとする戦争である。前のヨーロッパ大戦は、世界戦としては画期的のものであつたが、その根本性格に於ては近代内部の戦争であり、近代の延長たる性格を超出するものではなかつた。」(高山岩男『世界史の哲学』、「岩波書店版 序」、岩波書店一九四二年)

ただし、「体制内部の人間」について理解することは、実はマートン自身の「愛国心」とも密接に関係していたのである。それはマートンの経歴から明らかである。前述したように博士論文「十七世紀イングランドにおける科学と技術と社会」で学問的経歴を出発したマートンは、社会調査の分野でも大きな業績を挙げていく。マートンは、ハーバード大学、トゥレーン大学を経て、一九四一年コロンビア大学教授に就任し、またコロンビア大学応用社会調査研究所でP・F・ラザースフェルトと共に大規模な社会調査を運営していく。また第二次世界大戦中には、軍の調査機関でも活躍した。それがほかならぬマートンがいうところの「マスコミ研究」なのである。端的に言えば、軍が行う宣伝^{プロパガンダ}の効果を経験的に精査し、より効果的な宣伝^{プロパガンダ}を行うための高度に実用的な調査研究である。ここでの実績がその後のマートンの名声につながっている³。

知名人の「経歴」は、多くの場合その人物が偉くなった地点から出発して、過去を予定調和的に説明する傾向がある。過去の経歴を列挙して、それが当人にとっていかに役に立っているのか、機能を果たしているのかというふうに説明するわけである。十七世紀イングランドの研究(思想や科学をめぐる歴史研究)も軍の委嘱で行ったマスコミ調査(宣伝効果の研究)も、マートン知識社会学にあつては、車の両輪のように重要な機能を果たしているのだというわけである。マートン自身が有名な論文の中で「イデオロギーとしての機能分析」を論じている問題が、そのままマートンの経歴にもあてはまるわけである。ただし、視点をずらして一九三〇年代に博士論文の研究をしていたころのマートン自身に出发して考えるならば、

戦争は当人にとつても決定的な転機になったのではないだろうか。なにしろ、それまで古い時代の外国の科学史を研究していた人物が、アメリカが第二次世界大戦に参戦した一九四一年にコロンビア大学に転じ、そこで大規模な社会調査に従事するようになるのである。転機がなかったと考える方が不自然だろう。

多少意地悪な言い方になるが、「マージナルな人間」(ヨーロッパ種の知識人)としてヨーロッパの歴史を研究していたマートンは、戦争を機会に「体制内部の人間」の一員として活躍の場所を得たといえる。言い換えれば、マートンの経験的研究は第二次世界大戦中の軍部による大規模な社会調査と密接不可分の関係にある。このように考えていくならば、次のマートンの一文は意味深長であるといえるだろう。

「学問的焦点にこのような差異がある以上、なぜヨーロッパ種が受け手の調査を等閑にふし、他方アメリカ種がこれに専念したのか、その理由は簡単である。なお、問題となるのは、かかる学問的焦点自体が一定の構造的脈絡の中で現われてきたのだから、実はその脈絡の所産ではなからうかということである。事実そのことを示す証左はいくつかある。ラザースフェルトやその他の学者が指摘したように、マス・コミュニケーション調査は大部分市場の要求に応じて発達したものである。いくつかの大衆媒体間の、また各媒体内の機関相互のはげしい広告競争の結果、新聞、雑誌、ラジオ、テレビ等受け手の大きさ、構成、反応を客観的に測定したいという経済的需要がうながされるにいたった。そして各大衆媒体や各機関は、最大限の広告費をせ

しめようとして、競争相手の用いる受け手の測定尺度にひよつとして欠陥が見られはしないだろうかと敏感になり、そのために、容易に批判の余地を許さない厳格な客観的尺度が大いに発達せざるを得なくなったのである。こういう市場の圧力に加えて、最近軍部が宣伝(propaganda)に関心をもつようになったことも、受け手の測定に焦点をおくよう一助となった。というのは広告と同じく宣伝の場合でも、スポンサーはめざす受け手に宣伝が届いたかどうか、また宣伝がそのめざす効果をあげたかどうかを知りたがる。(四一頁)

当事者のマートンが回顧するように、戦時動員体制がもたらした技術革新に、アメリカ社会学も大きく依存しているのは事実である。しばしば指摘されるように、戦争は平時には不可能な速度で技術革新を可能にする。それが多くの人命を犠牲にする半面で、今日の人々は戦争が生み出した技術を日々利用している。それらの技術をいかに評価するにせよ、戦争は技術を生み出す。それらの技術は、いろいろな欠点をはらみながらも実用的であり、多くの人々に支持され、人々の欲望を満たし、現に人々の生活を根底から変革する。最もわかりやすい例が航空機である。ライト兄弟による動力初飛行は一九〇三年であったが、それからわずか四十年を経ることなくドイツの軍事産業が開発した最初の実用ジェット機が飛行している(一九四二年)。今日、世界中をジェット機で飛び回っている無数の人々は、戦時中にドイツ軍が開発した技術の世話になっているわけである。

同じことは、戦争とプロパガンダ技術の関係にも当てはまる。第二次世界大戦を戦った多くの国々と異なり、アメリカは大西洋と太

平洋の両方の戦線で「二正面戦争」を強いられた。最大の敵対者はプロパガンダ技術を正面に掲げるナチス・ドイツである。しかも、アメリカ合衆国は自他共に認める民主主義国でなければならない。大衆を主人公とする民主主義は、戦争にあっても大衆を動員するための技術を必要とする。そこでは、知識人やエリート階層だけを対象とした「学問(Wissenschaft)」よりも、大衆の思考様式を的確に把握する「科学(science)」が重要なのである。少数のエリートが多くを決定する体制に比して、プロパガンダの重要性が増すのは、アメリカもワイマール共和国と同様である。

第二次世界大戦はアメリカ合衆国にとっても「苦難の末の栄光」を実現した戦争であった。「戦争協力」をめぐるマートンの回想が、控え目な自己賞賛を含んでいることは興味をそそる。同時期に「戦争協力」を行っていたドイツ人や日本人がその後の身の振り方で苦労したのとは対照的である。他方で、第二次世界大戦はアメリカ社会学がヨーロッパ社会学に対する優位を確立するきっかけでもあった。マートン自身がその「きっかけ」の最前線にいて、大いに実績を挙げた。それは当人にとっても忘れがたい勝利体験だったにちがいない。現に、「勝利体験」はアメリカ社会学のヨーロッパ社会学に対する優位をもたらしした。

ここにはさらに重要な問題が含まれている。戦争は、アメリカで発展した経験帰納的な研究方法が成熟し、最大の成果を挙げた機会だったからである。戦争という国家規模の事業が大勢の研究者を動員し、大勢の人員が動員されるという事実が、それ自体として調査技術の発展を促す。同じことは大きな広告収入をめぐる競争とい

う現実の利益に直結したマスコミ研究についてもいえる。少数の学風を同じくする人々が行う「共同研究」とは異なつて、互いに会つて話をしたこともない大勢の人々が特定の研究プログラムにそつて集められ、一斉に作業をするには、誰が研究に従事しても同じ結論が出るようにしなければならない。学派によつて、個人によつて解釈や結論がいかようにでもなるといつた研究は、極言すれば、科学の名に値しないことになる。マートンがいうように、事実を確定する手続きが当初の仮説よりも重要なのである。「アメリカ種」にあつて、魅力的な少数者の「個人芸」がひどく忌避されるのはこのためである。マートンは、ヨーロッパの学者が得意とする個人芸を指して、「自己耽溺(self-indulgence)」と呼び、個人の見解を押し殺してまで事実の確定に献身するアメリカの学風をさして、「自己否定の戒告(a self-denying ordinance)」と呼ぶ。

面白いのは、マートン自身が「マージナルな人間」として異なつた領域の間を渡り歩いているという事実である。すでに本稿で観察してきたように、マートンは見慣れた「アメリカ社会学」とは相当に異なつた社会学者である。その経歴も著作も、「アメリカ社会学」にあつては少数派であり、異なつた領域が重なり合う辺境から思考を開始しようとする。

その上、マートンはヨーロッパの学者の「自己耽溺」を指摘し、アメリカの学者の「自己否定の戒告」について事情説明をしていないが、本人が「自己否定の戒告」にまったく従おうとはしていないことである。素直にそのまま従つていたならば、そもそもパーソンズと並び称されるマートンの「理論」は今こうした形で存在して

いないわけである。他方、アフォリズム集『巨人の肩の上で』をはじめとした、一連のかなり趣味的な性格が強い著作が「自己耽溺」的でないという事実を確定することは難しいにちがいない。

ここまで考えてくると、マートン自身が「アメリカ種」というよりも、強度に「ヨーロッパ種」に近い人物なのではないか？ という仮説を立てたくなつてしまう。本人に気兼ねせずにいえば、マートンは自国の巨大調査機関で働く無数の研究員よりも、ヨーロッパ人のマンハイムに似た思考様式をもつた人物なのではないだろうか？ 本稿で先に観察してきたマンハイムへの「批判」は、結局のところは同じような思考様式をもつた自分自身への自己省察だったのではないだろうか？ そんな人物が戦争を機会に動員され、そこで持ち前の有能さを発揮する一方で、「自己否定の戒告」に従順な同胞の姿に感銘を受けたのではないだろうか？

7. 歴史家という先行者

「しかし、ワグネル君、過去の諸時代は七重の封印をした書物なのだ。君方が時代の精神と呼んでいるものは、つまるところは時代時代の影の映つた歴史家先生御自身の精神にすぎぬ。」(ゲーテ『ファウスト』、高橋義孝訳)

ただし、マートンを単純に——本人のいう意味で——「ヨーロッパ種」と同定することはできない。とりわけ注目しなければならぬのは、「歴史」に対する独自の批判的な視点が存在することである。

「信頼性の問題を知識社会学者がこのように徹底的に無視す

る傾向は、おそらくその知的先駆者のうち、とりわけ歴史家から引きつがれたものであろう。というのは、通常歴史家の書物では、解釈の多様性は解決されるべき問題としてよりも、むしろ運命と解されているからである。もし解釈の多様性という事実が些かでも認知されているとすれば、それは諦めの気持で認知されているのであって、しかもそこには、観察と解釈の芸術的な個別の多様性についての若干の誇りもまじっている。」(四〇八頁・ただし訳一部変更)¹¹

歴史は確かに「ヨーロッパ種」の要点である。コミュニケーションだけにとどまらず、ヨーロッパの社会学の要点であるということもできる。¹²「歴史は科学か？」という毎度おなじみの論題が登場し、各方面の論者がいろいろなことを論じてきた。歴史についてさまざまな考え方があつて、ほとんどすべての歴史家が認めるのは「解釈の多様性」である。そもそも、「歴史についてさまざまな考え方があつて」という言い古された命題そのものが、歴史家にとっては彼らの存在理由をなしているとするらいえよう。歴史が多様ではなく、ただ一つの歴史観だけに統一されるべきだ、といった主張は、多くの歴史家にとってほとんど反射的に反感や敵意の対象となりうる。たとえば当人が特定の歴史観だけを信奉し、反对者に対して聞く耳を持たないといった態度で接している人物であつたとしても例外ではない。そういった人物であつたとしても「ただ一つの歴史観だけに統一されるべきだ」といって主張をしたら、その瞬間に自分が歴史家ではなくて、政治家や社会運動家になつてしまふことを自覚している。

このことは少し原理的なことを考えてみれば納得のいくことである。歴史は時間の経過によつて次々と変化していくことそのものを主題とする認識である。変化するのは権力者の力関係だけではなくて、思想も変化する。当然歴史をめぐる思想(＝歴史観)も変化していくわけである。観点を変えていえば、歴史家とは、過去の失われた権力関係や、古い思想と現在のそれらを比較し、人間社会や人間性の移ろいやすさといった問題に省察する人々であり、そこにこそ歴史という認識活動の根幹がある。仮に、時間的な変化というものをすべて捨象して、普遍的で不変の原理や、変わることはない権力の本質¹³といったものだけを取り出したならば、それはある種の哲学や人生訓、あるいは社会倫理であつて、歴史ではない。マーティンにとつては諦めをともなつた「運命(Fate)」であつたとしても、歴史家にとつてはそれが存在理由なのである。

ここまで考えてくると、本稿で先に論じてきた「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の事実上の住み分けが抱えている学問観(科学観)の違いに「歴史」がかかわつてくることが見えてくる。さらにいうならば、「歴史は科学か？」という古くからの問いが、以前とは異なつた形で重要になつてくるのである。二十世紀の初頭、古代史家のエドワルト・マイヤーと青年時代に古代史の専門的研究を行つていたこともあるマックス・ウェーバーが論争したとき、問題の在り処は、歴史は科学なのか否かという点にあつた。専門歴史家のマイヤーの考えでは、歴史は体系的な科学ではありえず、歴史の本質は過去の事実の記述である。¹⁵これに対して、ウェーバーは歴史が自然科学とは異なつた形の独自の科学でありうると考える。両者の見解の相

違は、マートンがいう「ヨーロッパ種」の社会学が成立期に経験した知的紛争であると考えることができる。「知的先駆者(intellectual antecedent)」の見解を代弁するマイヤーと、従来の歴史学とは異なった歴史科学を建設しようとしているウェーバーの立場の相違は、新しい学問が誕生する場合には不可避の衝突であるといえる。しかし、マイヤーとウェーバーにとって「歴史」が考察するに値する対象であることは同じである。問題は「歴史」をどう扱うかであって、歴史を扱うかどうかではないのである。この点は強調しておく必要がある。

これに対して、マートンが問題にするのはこの種の「知的先行者」からの影響をヨーロッパ種の欠点として問題視していることである。視点を変えていうならば、マートンはマイヤーとウェーバーの論争にあつて、事実上マイヤーの側の立場に立っていると考えることもできる。つまり、歴史は科学ではないので、科学であるべき社会学とは無縁なのだということになる。

先に論じたマートンによるマンハイム批判に戻ると、例えば、マンハイムは「中世後期における下層階級」が「自分らのもつ社会的政治的意義を自覚するにいたった」という論述を、あたかも「一般化された事実として不当な地位」を得ているかのように論じていると非難している。しかも、マンハイムだけではなく、ヨーロッパの学者の著述には、この種の事例は多すぎて系統的に論じることができないほどなのである。¹⁶

マートンによれば、マンハイム——に代表されるヨーロッパの学者——の議論の欠陥は、「知識」概念のいい加減さや曖昧さだけでは

ない。むしろ重要なのは、ヨーロッパの学者が、冷静に考えれば確定することができない事実を、あたかも周知のことであるかのように論じてしまうところにある。簡単にいえば、「中世後期における下層階級」が抱えている意識など、どうやって経験的に確定できるのか？ それどころか、彼らが「自分らのもつ社会的政治的意義を自覚するにいたった」というのはいったいどんな根拠があつてそういえるのか？ という問いに、マンハイムをはじめとした「ヨーロッパ種」は満足に答えられないからである。

理由は簡単である。過去百年程の時間を取り扱う現代史とは異なり、古代史や中世史には使える史料が限られている。「中世後期における下層階級」などという概念を仮説として設定することは可能であるとしても、実証的に取り扱うことのできる史料は限られている。最も勤勉な実証史家は、長い戦乱の時代を経過して半ば奇跡的に残されてきた修道院の文書といったものを発見することに使命感を感じているが、この種の手間のかかる仕事を大勢の人々に求めることは現実的ではない。当の専門家が毎度反省するように、この種の「一次史料」自体が、すでに、ごくごく限られた範囲の、しかも偏向したサンプルではない。そもそも中世にあつて文字史料を残せるような「下層階級」というのは、不可能ではないとしても、不自然な存在である。¹⁷ その上、例えば、修道院に残される史料は、少なくともキリスト教に対して忠実な人物が書いていることが想像できるからである。今日では考古学による研究成果を大規模に集計して、そこからある程度客観的な数値を取り出すといった努力も行われているが、もちろんマンハイムにその種の努力を期待することはありえ

ない。そもそも、マンハイムは中世史の実証史家ではない。おおよそ想像できるのは、せいぜい知名人の書いた著書に登場する「中世後期における下層階級」への言及であり、多くは歴史家が書いた書物が下している個人的な結論をそのまま頂戴しているのだろう。同時代の多くの歴史家がそういつているから、そうなんだろうというわけである。

これは専門の歴史家から広義の「歴史社会学」が非難される問題点でもある。事情は同じ例を使うとわかりやすい。歴史社会学者が「中世後期における下層階級」を、まるで現在の日本やアメリカの低所得層と同じような歴史的存在であるかのように議論した場合、比較的根拠は一体なんだろうか？ この場合、「中世後期における下層階級」と種々の調査や統計で検証されている「低所得層」との間に実証的に比較しうる根拠など、考えうるかぎりほとんど何も存在しないからである。「自分らのもつ社会的政治的意義を自覚するにいたった」という論述をすることにいたってはほとんど絶望的で、すでにここまでくると科学的命題というよりは、歴史叙述上の修辞（レトリック）と見なしたほうが適当であろう。この種の修辞は専門の歴史家も日ごろ愛用しているからである。

アメリカ種が「歴史」を論じない理由に対するマートンの説明は、かなり魅力的であり、説得的でもある。

「事実やデータに対する指向がこのように相違することは、研究すべき主題の選択と問題の規定にもかかわりをもつ。経験的検証に重点を置くアメリカ種は、歴史的過去には殆んど注意を払わない。というのは、過去の世論や集団的信念に関するデー

タの妥当性は、それと比較できる今日の集団的信念に関するデータの規準でもって判断すると、疑問となるからである。以上のことから、アメリカ種が宣伝資料への反応、種々な媒体の宣伝効果に関する実験的比較のような、短期の問題を第一義的に扱う傾向が一部説明できるだろう。歴史的資料を事実上無視するのは、重要な長期的結果への関心がないとか、その認識がないとかのためでなく、そうするためには、入手できないデータが必要だと考えられているからにすぎない。」（四〇五頁）

興味がないのではなくて、方法的に困難だからなのだというわけである。これはなかなか目にする機会のない議論である。ヨーロッパに属する人々は、素朴に、アメリカには長い歴史がないから興味を抱こうにも抱く対象がないのだと考えてしまいがちである。説明はいろいろあるだろう。各種の複雑な論理を考え付き、修辞を凝らして説明しても、煎じ詰めれば結論は同じということもよくあるに違いない。これに対して、アメリカ人のマートンがこの種の議論——偏見、決め付け——を意識しているどころか、すでに聞き飽きてうんざりしていることはこの引用からだけでも伝わってくるのではないだろうか。偏見や決め付けは、それらが幾分かでも広く受け入れられた事実認識を含む場合、なかなか打ち消すことができないものである。

これに対して、マートンの言い分は、まさにアメリカ種の立場にのっとった説明である。一言でいえば、「歴史」はアメリカの独自の学風からして論じるのに不適当だから論じないのだ、というわけである。やはりアメリカの学者からはこういう説得力ある形の説明を

してほしい。ただし、マートンにとって不利なことは、現在のよう
な研究体制で行われる経験的研究それ自体もまたかなりの年季を重
ねており、すでに世紀で数えるほどの蓄積を経ているが、いぜん
として現下のアメリカ式経験研究は「現在」のことにしか関心を抱
こうとしないという事実である。これはどうしたことだろうか？ やは
り偏見どおりアメリカ人には「歴史」は不適当なのだろうか。

ただし、ここにはもっと重要な問題がかくれているのではないだ
ろうか。それは経験帰納法という方法が含んでいる宿命的な性質で
ある。マートンがいみじくも書いてるように、アメリカでもっと
も盛んになった経験主義的な手法は、原理的に過去や「歴史」を論
じることができないのではないだろうか。統計や数学やグラフを多
用する今日の研究者を一瞥すれば分かるように、経験主義的な手法
は自らの方法の斬新性や、科学的な確実性を誇る。自分は最新の方
法で最も信頼にたる成果を挙げているのだというわけで、「歴史」ど
ころか、一世代前の同業者に対してすら自分の斬新さを誇ろうとす
る。このため、百年にわたって経験主義的な手法を入念に重ねてき
ていながら、肝心の方法や視点が猫の目のようにぐるぐる変わって
しまうために過去の同分野の学者が書いた研究も利用しにくいもの
になってしまっているのである。例えば、マートンがこの文章を書いた一
九四〇年代当時のアメリカのマスコミ研究者が書いたマスコミ研究
を、今のアメリカのマスコミ研究者が読むだろうか。仮にそれが可
能であり、百年前、五十年前のアメリカのマスコミをめぐる経験的・
実証的な研究が今日の同趣旨の研究と有意に比較対照されたなら
ば、そこには立派な「アメリカ・マスコミ歴史社会学」が成立する

に違いない。何も「歴史」とはシーザーやジンギスカンやフリード
リヒ大王の時代ばかりである必要はないだろう。たとえ百年でも「歴
史」としては十分な距離感を実現できるはずである。しかし、そん
なことをするのはアメリカの歴史家であって、同国の社会学者では
ないだろう。

このように考えてみると、問題は「アメリカ」だけには限定され
ないことがわかってくる。そもそも、学問の方法をめぐる議論がナ
シヨナリズムに変わってしまうことは警戒しなければならぬ。問
題は、マートンの愛国心ではなくて、アメリカで最も発展した経験
帰納法という研究方法がもつ性質にある。簡単にいえば、経験帰納
法は大きな組織や制度を必要とする研究方法であり、同時代だけを
研究するのに適した科学事業なのではないだろうか。この意味で、
経験帰納法は「会社」や「役所」と親和性をもっている。現に、経
験帰納法の普及は「アメリカ」だけに限定されているわけではない。
いまや巨大組織を不可欠とする研究方法は、世界中に拡大し、日々
影響力を増しているからである。まさに科学研究そのものの「グロー
バル化」が進行しているのである。

もちろん、この種の研究方法・研究組織が万能であるのかといえ
ばそうともいえない。政治権力や大資本の力を用いれば、大きな組
織や制度をある一時点において成立させることはそれほど難しいこ
とではない。現に、アメリカだけではなく、ヨーロッパ諸国にも日
本にもいろいろ存在している。しかし、同じ手法を保持したまま、
たとえば五十年、百年と存続していくことは困難である。権力や資
本は短い時間——比喩的な意味での「瞬間」——においては万能で無

敵の外観を呈するが、長い時間軸を当てはめると驚くほど無力だからである。筆者は、以前に行っていた研究の関係で十九世紀最後の数十年にドイツで行われていた労働問題についての経験的調査について「一次史料」を通じて多少なりとも知っている¹⁸。しかし、当時の、いわゆる「歴史学派」が行った膨大な実証研究が下した結論が、今日の同種の問題を研究する人々にとってどれだけ有意義なものであるのかは疑問である。研究方法がかわってしまおうと、それにしたがって取り出される事実も大きく変化するからである。

結局のところ、経験帰納法とは、普遍的な事実の究明というよりも、それぞれの時代に主流となった方法を用いて大規模に行う同時代に対する定点観察に最も適した方法なのではないだろうか？ 経験帰納法が得意とするのは短期の事実であって、短い期間を越えて妥当する事実を明らかにすることは困難なのではないだろうか。別の観点からいえば、次々と変化していく時代ごとの社会問題に沿って行われる経験的研究を、時代を超えて互いに比較すること自体が、経験的に厳密な検証が可能なのか？ という疑問もありうる。人口や子供の出生数といったどの時代の人々も共通して関心を抱き、しかも数字として確定しやすい問題ならば厳密な比較も可能であろう。

しかし、マートンが先にあげていた例でいえば、アメリカ種のマスコミ研究が主題とする時々の政局にあたっての大衆の「意見」が、五十年後にも同様の経験的現実性で比較可能な形で提供できるとは考えにくい。政界や財界、軍部、さらには学界の、その時々の力関係がほかならぬ「マスコミ」の「現実」を作り出している、などということをマスコミ研究の研究者に向かつてくどくどと説明する必

要はない。釈迦に説法。まさにそれが彼らの研究対象だからである。むしろ、彼らは刻々変わる力関係の今現在の「瞬間値」を的確に言い当てようと努力しているはずである。ところが、非常に微妙な力関係の合力である「現実」は時間の流れには全く無力であるというのも事実である。瞬間値に肉薄する人々にとって五十年前の瞬間値など、そもそも想像力の及ぶ範囲ではないのではないだろうか。

他方で、各時代に主流となったそれぞれの流儀の「研究」を、お互いに対比してあれこれ理論的に考えるのは、決して経験的でも帰納的でもないのではないだろうか？ 要するに、これは、マートンが「知的先行者」として社会科学から排除しようとする歴史家か、あるいは「ヨーロッパ種」の知識社会学者が考えることなのである。

8. 芸術との関係

「舞台設定を美術館だしよう。主人公が入ってきて、いきなり、
「ああ、美術館はいいなあ」
と独りごとを言う。これがいちばんダメな台詞の例である。」(平田オリザ『演劇入門』)

本稿の議論は「歴史」と経験帰納法の関係にまで及んできた。ただし、重要な問題はまだ残っている。マートンは、ヨーロッパ種の知識社会学者が歴史家の真似をして「観察と解釈の芸術的な個別の多様性についての若干の誇り」を感じていることを非難していた。実は、マートンにとって、本当の悪者は歴史家ではなくて「芸術」

なのである。

「同一の事件についても、その解釈は異らざるを得ないのだ」というこの教理は、歴史家の間に徹底的に確立されてしまっていて、大抵の歴史の著述の序文に何らかの形で必ず現われてくる。歴史が文学や芸術のような人文科学の伝統の中に置かれるのであれば、こういう考えはすぐに理解できる。芸術の領域では、およそ解釈に究極のものなどあり得ないとされるが、これは職業的謙虚さの表現（その表現がどれ程因習的なものであろうとも）であると共に、歴史家はいつも人物や事件や社会運動についての解釈を改めるものであるという反復的経験の記述でもある。この問題に関する限り、科学者も『究極的』解釈を期するものではない。もっとも、解釈の多様性に対する科学者の態度は芸術家とは著しく違っているが。」（四〇八頁）¹⁹

「芸術」に対する態度こそが、ヨーロッパ種からマーティンの立場を切り離している要点なのではないだろうか？ それどころか、ヨーロッパ種の論者ならば、マーティンの論述をもって両者の根本的な相違が明らかになったと考え、「一般化された事実として不当な地位」を与えてしまいうのである。

マーティンが「芸術」をここで「科学者」から「著しく違っている」ものであると判断する理由は、少なくとも、この人にとっては原理的なものである。芸術を、マーティンの科学社会学について論じられる場合にしばしば登場する「マーティン・ノルム」に照らし合わせてみると、このことは明らかである。マーティンは「科学」の条件として次の五つを強調した。公有主義 (Communism/Communalism) 、

普遍主義 (Universalism) 、利害超越 (Disinterestedness) 、独自性 (Originality) 、系統的懷疑主義 (Organized Scepticism) からなる「マーティン・ノルム」は、マーティンを創始者と仰ぐ科学社会学にとどまらず、科学論や科学哲学の領域でも広く言及されてきた。²⁰

これらの中で芸術が居所を得ることができるのは、「独自性」と「利害超越性」だけである。マーティンの言葉を借りれば、「芸術は差異——芸術家のそれぞれ独自の、たとえ私的でないまでもパーソナルな知覚の表現として——を強調する」（四〇九頁）ので、まず「公有主義」や「普遍主義」の「ノルム」に違反する。芸術家の表現はあくまでも個人のものであり、古典的な事例を考えても集団（流派・楽派）だけのものである。作品成立の根本を成す動機づけや製作技術は、多くの場合秘密であり、芸術家自身が自覚していないことも多い。芸術は芸術家の個人の人格に終始して評価されるべきであり、その芸術表現に興味を抱かない人々にとっては無意味であり、評価ゼロである。「系統的懷疑主義」に至っては、例外はあるにせよ、多くの芸術とはおよそ無縁の概念であり、芸術家の創作活動に致命的な影響を及ぼす可能性すらある。社会に対する懷疑が風刺の原動力となり、社会悪に対する批判精神が、いわゆる「社会派」の表現を生み出すことは事実である。しかし、マーティンがいう「系統的懷疑主義」はこれらのことではなくて、残りの四つのノルム、「独自性」や「利害超越性」や「公有主義」や「普遍主義」を踏み外す行為に対する懷疑・批判精神のことである。客観的な芸術、あるいは不偏不党、中立公正を標榜する芸術というのは、不可能ではないとしても、おそらく多くの人々が考える芸術とは別のものであるに違いない。そも

そも誰もが慣れた事実を繰り返すなどというのは、芸術的表現にあつては無意味な行為でしかないからである。

歴史家との関連に戻ると、歴史には常に芸術の影が付きまとう。

すでにギリシア神話の歴史の女神クリオは、音楽や舞踏や詩の女神たちの一員であつた。²¹ 事実検証に関してはマートンの調査チームも顔負けの肉薄を敢行する歴史家も、いざ「重要な史実(事実)」を選択する段となると、究極的には当人の個人的解釈にしか根拠を見出すことができない。カエサルが何年何月何日にどの川を渡つた、というのは厳格に決定しうる事実だが、カエサルが歴史上の人物として重要であると判断するのは史観であり、その史観を選んだ歴史家個人(や集団)でしかない。その気になれば「カエサル」が登場しないヨーロッパ古代史の記述も不可能ではない。人物名を意図的に排除した歴史叙述というのも試みられている。さらに知名度の低い人名の場合はなおさらである。反対に、さして長編でもない史書にカエサルの逸話がやたらと詳しく登場することもありうる。こちらも歴史家の個人的判断である。この場合、カエサルの人間をいきいきと描き出す歴史家の技量は、間違いなく芸術家のものである。

単に文学的な技量にとどまらず、歴史の発想の源は、多くの場合、ある種の芸術的直感に関係している。そもそも歴史家が「カエサル」を登場させるのは、この人物を登場させることによって自らの史観がより一層説得力ある形で表現できると考えるからである。そして、自らの史観を最も説得力ある形で読者に印象付ける歴史家は、「偉大な歴史家」と呼ばれる。「偉大な歴史家」というのは有能な実務調査者であるだけではだめで、「史観」という名の物語を構想する文学者の

の性質を必要とする。

「系統的懷疑主義」に関しては歴史家にあつても大いに推奨されてきた。それどころか、懷疑が行き過ぎてしまつて、歴史相対主義の淵にはまり込んでいく歴史家も大勢いる。ところが、「公有主義」や「普遍主義」の「ノルム」については、歴史家本人が「公有主義」や「普遍主義」を標榜しているのと、それを実際に実現しているのとは慎重に区別する必要がある。

マートンが代弁するアメリカの社会学はこの手の性質から手を切り、あくまでも事実の確定、あるいは思弁を排し、事実根拠に「中範囲の理論」に専念しようというわけである。ただし、ここまで本稿の議論に付き合つてこられた読者の多くは、この問題はこんなに簡単に片付けられるようなものではないという、全く妥当な印象を抱いているに違いない。まさにそのとおりである。

まず湧いてくる疑問は、上記の「マートン・ノルム」それ自体に対するものである。しばしばいわれるように、自然科学の理論にあつても芸術家のそれに似た直感が介在する。巨大な実験設備で働く無数の人員とは別に、庭に植わっている林檎の落下を見て、あるいは公衆浴場の湯船につかつていて「理論」を発見する科学者は、科学の歴史上珍しくはない。そんなことは、ニュートンについて長年研究してきたマートン自身が百も承知だろう。厳格な経験帰納主義者にいわせるならば、林檎の落下を目撃する以前に、ニュートンは「引力」をめぐつて種々の実験を繰り返し、試行錯誤を繰り返していたのだ、と説明しようとするだろう。ともかくも実験を続けていれば、いつかは画期的な理論に行き着くのだという信念である。しかし、

本稿ですでに論じてきた議論の繰り返しになるが、当時「引力」について研究していた大勢の研究者の中で、なぜニュートンだけが有名な理論に到達できたのか？ という疑問に、経験帰納法は答えられない。現に、十七世紀の物理学は「ニュートン」という個人の私的で独自の活躍によってかなり進展させられているからである。この問題は、もちろん仮説演繹法の独壇場である。そして、仮説演繹法は、科学の根幹を特定の個人の直感や着想、思いつきから導き出すとする点で、「ヨーロッパ種」と親和性があるのは間違いない。

次に湧いてくるのは、歴史家自身がすでに一九世紀末から二十世紀初頭にすでに、大規模な組織による研究を行っており、マートン自身のいう「体制内部の人間」として当時全盛であった「歴史学派」を構成していた。すでに指摘したように、大規模な組織的実証的(経験的)研究を行っていたのである。そして、彼らの遺産は今日の実証史家に受け継がれている。それにもかかわらず、同じ経験主義的研究手法であるはずのヨーロッパの歴史家とアメリカの社会学者の間に認識上の差異があるのは、いったいなぜなのだろうか？ 経験帰納法の信念に従うならば、厳密な手法で経験的事実を確定していくならば、共通の普遍的認識に到達するはずである。ところが実際には共通の認識に向かうどころか、ますます解離が著しくなっていくように思われる。なぜだろうか？

(つづく)

注

1 経験帰納法と仮説演繹法の関係については、先にも引用した今田高俊が興味深い議論を行っている。今田によれば、経験帰納法(あるいは観察帰納法)と仮説演繹法とは、専門の科学哲学が熱心に論じてきたのとは異なっており、どちらかが優先されるような性質のものではない。むしろ実際の「科学」は経験帰納法と仮説演繹法にもう一つ意味解釈を加えた三つの働きの使い分けから成り立っており、使い分けは各々の科学の性質に関係している(今田高俊『自己組織性』、創文社一九八六年、一三頁以下)。私見を付け加えるならば、科学哲学の領域で優勢な仮説演繹法の優位は原理的には揺るがないが、実用的な次元では経験帰納法の方がより多くの人員を動員する上で有利であるために、今日のますますの隆盛を可能にしているのではないだろうか。

2 何よりも興味を引くのは、二十世紀の後半以降に知識社会学の手法を使った歴史研究の領域で上げられた大きな成果の多くが、フリッツ・リングガールの「読書人の没落」というテーマを繰り返し再生していることである(フリッツ・リングガー『読書人の没落』、世紀末から第三帝国までのドイツ知識人、名古屋大学出版一九九一年(原書一九六九年)。マンハイム流の知識社会学が「自由に浮動する知識人」の自由を誇称するものであったのならば、「読書人の没落」はマンハイムが言い残した残り半分の現実を補うものであるということが出来る。つまり、「自由」とは、「重要ではない」、あるいはもつと正確に言えば、「重要でなくなりつつある」という現実の残り半分であったのだということである。さらに議論の幅を広げていえば、ピエール・ブルデューの一連の仕事も、マンハイムの「言い残し」を一層明るみに出すものであったと考えることもできる(ピエール・ブルデュー『ディスタンス・シオン』I・II、石井洋二郎訳、藤原書店一九九〇年。ピエール・ブルデュー『再生産』、宮島喬訳、藤原書店一九九一年)。同じテーマを日本の近代史・近代教育史において展開する仕事には、竹内洋の一連の著作がある(竹内洋『立身出世主義 近代日本のロマンと欲望』、増

補版、世界思想社二〇〇五年。竹内洋『学歴貴族の栄光と没落』、中央公論新社一九九九年。『読書人の没落』というテーマは、同じ読書人である著者と読者が共通して抱く関心に直接的に働きかけるという点で魅力的である。ただし、このことはまさしく学問そのものが自己言及と自己産出を繰り返す過程であり、システムであるということ、典型的に物語っているにすぎない。

3 社会調査をマートンとともに進めてきたラザースフェルトは次のように書いている。

「もういちど一九四八年の社会科学調査審議会の会議に立ち戻ろう。明らかにマートンは基調演説するために選ばれた。指導的理論家としての彼の名声に加えて、コロンビア応用社会調査研究所の所長代行としての、また戦時中のワシントンにおけるストファアの陸軍調査スタッフとの連絡者の一人としての彼の仕事はよく知られるようになっていた。」(P.F.ラザースフェルト『応用社会学 調査研究と政策実践』、斎藤吉雄監訳、恒星社厚生閣一九八九年、三四頁、ただし訳語変更)

4 マートン「顕在的機能と潜在的機能」の第三節のタイトル(『社会学論と社会構造』、三二―四二頁)。

5 戦時下のアメリカ軍部による知識人動員の例としては、対外プロパガンダを統括する組織として一九四二年六月に創立されたアメリカ合衆国戦時情報局(Office of War Information=OWI)が有名である。その成果の一つが、ルース・ベネディクトの『菊と刀』(一九四六年)である。

6 この部分の少し後では次のように書いている。

「以上のような市場と軍の要求によって、マス・コミュニケーション学者が受け手の測定に大きな関心をもつようになったのであるが、そればかりでなく、かかる要求は受け手を記述し測定する範疇の形成にも役立った。つまり一つの調査の目的はその範疇と概念を決定する一助となる。したがって受け手の測定に関する範疇としては、第一に収入階層(結局のところ商品の販売や取引に関心をもっている人々にとって、これは明らかに重要なデータの一

種である)、性、年齢および教育(しかるべき集団に対しては、どんな広告販路が最も適当なのかを知ろうとする人々にとって、この教育という範疇は明らかに重要である)のようなものがある。しかし、性、年齢、教育および収入のような範疇は、社会構造における若干の重要な地位と相对应することがあるので、マス・コミュニケーション学者の展開する受け手測定の手続きは、社会学者にとっても直接の関心事である。」(四一―頁)

7 以前日本の京都学派の「戦争協力」をめぐる評価の動きについては、下記の拙稿を参照されたい。

大飼裕一「世俗の京都学派」、『北海学園大学 学園論集』第二二六号、二〇〇五年一月二日

大飼裕一「還俗する京都学派?」、比較法史学会編『規範から見た社会』未来社二〇〇六年

8 戦時下のアメリカ軍部が行ったプロパガンダは、周知のように「日本人論」の領域にも決定的な役割を果たしている。アメリカの日本現代史家ジョン・ダワーが指摘したように、一九四五年をはさんでアメリカのプロパガンダは前後二つに分けられる。前者は戦時下にアメリカ国民に向けられたプロパガンダであり、後者は占領下の日本国民に向けて占領の正当性を繰り返し言い聞かせるためのプロパガンダである(ジョン・ダワー『敗北を抱きしめて』、三浦陽一他訳、岩波書店二〇〇一年)。

9 次の一文もまた、「ヨーロッパ種」と「アメリカ種」の相違を描いて見事であるといえる。

「集団信念や大衆信念に関する或る種のデータがどれ程論議の種類になろうと、またそれから得た結論がどれ程非難されようと、ヨーロッパの学者は、歴史的データの研究を通じて好んで長期的発展の方を扱う。それに対してアメリカの学者は、科学的問題となるための必要条件をもつと十分にみだせるデータを用い、また長い歴史から切断された当面の状況に対して個人が示す当面の反応だけに限りながら、短期の事例を丹念に取り扱う。しかし、いうまでもないことだが、このようにうんと局限された問題を經驗的に

扱う場合に、アメリカの学者は関心の中心をなしている問題そのものを、調査から削除してしまうことがある。ヨーロッパの学者は、自分が根本的に関心をもっている問題がたとえ思弁的事柄にすぎなくとも、それをそのまま保持するのだという旗印を高く掲げるし、アメリカの学者は、いかなる代価、したがって最初研究の機縁となった問題を放棄するという代価を払ってでも、経験的データの妥当性を確認するのだという基準を高く掲げる。アメリカ流の厳格な経験主義には、自己否定の戒告(a self-denying ordinance)が含まれており、そのための社会構造の変化と関連した、重要な長期にわたる観念の動きのときは、到底実行できない研究主題として殆ど捨てられてしまう。一方、ヨーロッパ流の思弁癖には全面的な自己耽溺(self-indulgence)が含まれており、そのため大衆の動きに関する印象がそのまま事実と解せられる。また、そのため、大衆の行動や信念に関するこれらのいわゆる事実なるものを究極的に証明するものは何か、という煩わしい問題を敢えて取りあげようとする人は殆どいない。」(四〇六頁)

カナダの大学の社会学者ギー・ロシェが、パーソンズについてフランス語の著書の中で興味深いことを書いている。

「タルコット・パーソンズは、彼の著作『社会体系論』(The Social System)を妻に捧げるさいに、自分自身のことを「治療しがたい理論家」と述べた。過去四十年間にアメリカ社会学で演じられたこの人物の経歴と役割を、これ以上に明らかにする言葉を見出すことは不可能であろう。タルコット・パーソンズは、アメリカの社会学者の間で、特別な、目立つ位置を占めている。彼が舞台に登場するまでは、アメリカ社会学は経験主義に支配されていて、詳細で、そして視野の狭い研究の泥沼に沈んでしまいそうな危険になった。パーソンズは、理論的革命をもたらした。彼の前業績は、ただ一つの目標、すなわち社会学に真に科学的な地位を与え、同時に社会学を他の社会科学に論理的に関係づける意図をもつ、概念的で理論的な枠組みを展開することであった。この一つの基本的目的が、一見して欠けていると思われるパーソンズの著述に一貫性を与えるのである。」(ギー・ロシェ『タルコッ

ト・パーソンズとアメリカ社会学』、倉橋重史・藤山照英訳、晃洋書房一九八六年、一五頁)

11 原文を挙げる。

This systematic neglect of the problem of reliability may possibly be inherited by the sociologist of knowledge from the writings of historians among his intellectual antecedents. For in the writings of historians the diversity of interpretation is typically taken not so much as a problem to be solved, but as fate. If recognized at all, it is recognized with an air of resignation, tinged with a bit of pride in the artistic and therefore individualized diversity of observation and interpretation. (p. 501)

12 筆者は「歴史」あるいは「歴史科学」を鍵にマックス・ウェーバーの「社会学」が成立する過程を論じた。そこで問題としたのは「社会学」をヨーロッパ歴史科学の新たな事業として理解することである。犬飼裕一『マックス・ウェーバーにおける歴史科学の展開』、ミネルヴァ書房二〇〇七年。

13 例えば、歴史家のエドワルト・マイヤーが書いた論文に対するマックス・ウェーバーの批判論文は、『ヨーロッパ種』の「社会学」草創期を特徴づけるものであるともいえる。エドワルト・マイヤー、マックス・ウェーバー『歴史は科学か』(改訂版)、森岡弘通訳、みすず書房一九八七年。上記拙著参照。

14 二十世紀前半に、新カント派が「規範学」と呼んだもの。マートンがおそらく最大の敵対者として念頭においていた議論を先回りして紹介しておく、リッカートに代表されるような新カント派は、歴史的認識と自然科学的認識の相違を徹底的に明らかにし、歴史科学の認識が独自の意義を哲学的に根拠づけようとした。

15 マイヤー／ウェーバー『歴史は科学か』、三頁。

16 この段落の引用は、マートン四〇三―四〇四頁。

17 年代的に中世史の範疇には当てはまらないがイタリアの歴史家カルロ・ギンズブルクが『チーズとうじ虫』で行った研究が、マートンの

20

『社会理論と社会構造』第十六章「科学と民主的社会構造」。ここで

〇八一四〇九頁

るために研究が始められること、これがポイントなのである。〔四
相違は概念図式の不十分さか、それとも最初の観察の不十分さか
を示す証拠だと考えられること、そしてこのような相違を除去す
たい……〕と述べれば、何と奇妙なことであろうか。成程、理論
的解釈の相違は科学にも生じ得るし、また事実しばしば生じてい
るが、これが肝心の問題点なのではない。そうではなくて、この
相違は概念図式の不十分さか、それとも最初の観察の不十分さか
を示す証拠だと考えられること、そしてこのような相違を除去す
るために研究が始められること、これがポイントなのである。〔四

19 18

上記拙著。

これに続けてマートンは次のように書いています。

「解釈の多様性は避けがたいという教理をとにかく論じなくとも、
信頼性の問題に関して歴史家や知識社会学者の間に見られるこの
ような暗黙の態度を理解することは、十分可能である。ただこの
点をよりよく理解しようと思えば、右の教理と科学者の著述に典
型的に現われる見解——特に自然科学者の著述に非常にはつき
りと現われ、また或る程度まで社会科学者のそれにも現われてく
る——を比較対照してみればよい。歴史家は同一のデータに関す
る異った解釈を平気で、しかも楽しい諦めに近い気持ちで受け
とっているが、科学者はこの事実をもって、安定点がなく動揺し
ているしるしだと見なし、そういう観察が果して信頼できるか、
またそういう解釈が妥当であるかと疑問を投げかける。もし化学
の書物の序文で、歴史家流に、「他の人は燃焼に関する同一のデー
タを私とは違ったふうに解釈するであろう。これは実際上避けが
たい……」と述べれば、何と奇妙なことであろうか。成程、理論
的解釈の相違は科学にも生じ得るし、また事実しばしば生じてい
るが、これが肝心の問題点なのではない。そうではなくて、この
相違は概念図式の不十分さか、それとも最初の観察の不十分さか
を示す証拠だと考えられること、そしてこのような相違を除去す
るために研究が始められること、これがポイントなのである。〔四

批判に対する「ヨーロッパ種」からの反論というよりは応答として有
効であるといえるだろう。ギンズブルグは一六世紀イタリアの一人の
粉挽き屋の存在に注目し、この特異な人物がその独自の異端的世界観
のためにカトリック教会によって焚刑に処されるまでを追っていくこ
とで、いうならば「中世後期における下層階級」の単独例を描き出す
ことに成功した。もちろん、ギンズブルグの仕事はマートンがいう意
味での経験的な確実性を実現しているわけではない。ギンズブルグ
『チーズとうじ虫』、杉山光信訳、みすず書房（新装版）二〇〇三年。

21

「広く財の共同所有という、一般的な意味での『COMMUNISM』
ということが、科学のエトスの第二の構成要素となっている。科
学の実質的な知見は、社会的協働の所産であり、共同体に帰属す
る。それらは共同の遺産を形作っており、そこでは個々の生産者
の持分がきびしく制限されている。」（五〇九頁）

他方で、アメリカの歴史（理論）家ヘイドン・ホワイトが有名な『メ
タヒストリー』でやろうとした「挑戦」についても通常とは別様の理
解が可能になってくる。それはあらゆる歴史叙述が含んでいる構造と
しての「物語（ナラティブ）」を指摘することで、歴史という知的営為
と科学とが結局のところ相容れるものではないのだということを結論
付けた。この種の「挑戦」に対して普通の歴史家たちは、歴史の科学
性がどうのこうのといった昔風の議論を並べることでお茶を濁してい
た。残念なことには、この種の議論をする歴史家の頭の中にはマルク
スの「科学」ぐらいいしかなかったもので、ホワイトに対する反論は不可
能であった。なぜならば、ホワイトが主要な攻撃対象としたは、まさ
にマルクスのような形で歴史を「科学」へと偽装しようとしてきた事
業だったからである。しかし、マートンの議論を通過した——正確に
は、復習した——後で考えてみると、マートンとホワイトという二人
のアメリカ人の発想には共通点がある。それは、ヨーロッパ由来の
ミューズの女神たちを経験主義の世界において飼ひ慣らそうとする意
図である。なぜならば、ミューズの女神たちは気まぐれであり、不公
平で、優れた詩人や哲学者や作家、そして偉大といわれる歴史家のよ
うな人々にしか恩恵を与えてくれないからである。しかも、それぞれ
の人物に舞い降りた女神はそれぞれに異なっている。アメリカの学者
がほとんど生理的に受け付けられないのがヨーロッパ人のミューズ信仰で
あり、芸術家気取りの自己耽溺なのである。